

宗教対話に有益な仏教の伝統的資源

魏 道儒

菅野博史 訳

(一) はじめに

現代世界において、宗教対話はすでに学術界の理論的な構想ではなく、各宗教がまさに進めている積極的な探求と実践である。宗教間の衝突や対抗を除去し、宗教相互の意思疎通と理解を増進させ、世界平和を擁護するなどの方面における宗教対話の作用は、すでに各方面の広範な関心を引き起こしている。宗教対話を実現する必要性、可能性、重要性、前提条件、実践方法などに対しては、すでに国内外の関係の学者に重視

され、討論されている。

宗教間の意思疎通、交流、対話の歴史は、宗教の伝播の歴史と同様に古いと言いうことができる。二千年以上の伝播の歴史を持つ仏教について言えば、その実践のなかで、宗教の意思疎通を強化する豊かな経験を積み重ねてきた。その学説のなかには、宗教対話に有益である貴重な思想的資源が蔵されている。仏教が諸宗教との関係処理する実践の歴史を振り返れば、それらの伝統的な智慧の資源を開発することは、人々が現代の世界的な宗教対話を認識し、現代の宗教間の複雑

で錯綜した関係処理することによって、疑いもなく重要な参考価値を有しており、同時に仏教自身の健全な発展にも有益である。これらの方面について、探求に値する内容はとても多いと言わなければならないが、本論では簡潔に四点について述べようと思う。

(二) 変化と融通性

変化の観点によって世界・社会・人生・自己自身を見ることを強調し、社会と衆生の需要に適応する融通性を提唱する。仏教のこれらの思想と主張は、理論上から、宗教対話のためにできるだけ広大な空間を提供した。

初期仏教が始まってから、仏教はいわゆる「法印」の説、つまり真実の仏教かどうかを判断（証明）する基準を提示した。「三法印」あるいは「四法印」の先頭に列せられるのは、「諸行無常」であり、世界のすべての事物はすべて絶えざる変化、変動のなかにあることを意味し、静止、硬直化した観点によって世界・社会・人生・自己自身を見ることに反対する。これらのすべ

てが変化のなかにあるということは、永遠不変の主宰者が存在するという信念を否定することであり、あらゆる仏教の学派がすべて堅持するものである。特に大乘仏教は、変化の観点を強調すると同時に、衆生の需要に適応することを目的として、布教の方式、乃至、修行の方法と手段の融通性（臨機応変の手段）を教義の原則として取り扱い、いかなる教条をも改変できないものとは見なさない。それゆえ、大乘の適応能力はいつそう強まり、伝播のルートはますます多くなった。どこに伝播するかを問わず、すべてその民族の特色を帯び、しかも社会の需要に適応し、重大な変化を生じることができた。明らかに、永遠に不変である宗教は一つもないし、完全に変化を否定し、完全に改革を拒絶する宗教も一つもない。しかし、変化を承認するかどうかをその宗教の真偽を判断する第一の基準とし、臨機応変の手段を基本教義の高みにまで引き上げることとは、仏教以外の宗教のなかではあまり見かけないのではないかと思われる。

どの宗教もその発展のなかで、程度は異なるが、自

ら調整して新しい情勢に適応する過程を経たことがある。宗教間において、相互に寛容な態度をもって対話を展開することは、その宗教自身が社会に適応する現われである。変化を強調し、融通性を重視する仏教の基本教義は、理論上から、世界宗教間の相互交流のために、できるだけ広大な空間を開拓した。

古代、現代を問わず、宗教間の衝突と対抗をもたらす原因は多く、また複雑であるけれども、ただ宗教自身の理論方面から考察すると、衝突は互いに関係する宗教の時代遅れの古い教条といつも結びついている。特に異なる宗教信仰の人々の接触がますます頻繁になつてゆく現代の状況においては、静止的な観点によつて相手方を取り扱い、自己の永遠に変わらない教義を堅持し、いかなる融通性もなければ、相互の意思疎通や交流は展開しづらく、衝突と対抗は避けることができないものになる。社会の発展に適応する融通をきかした智慧を用いれば、宗教間の対話と交流の余地を切り開くことができるだろう。したがって、現代の宗教の平等な対話を促進する角度から見ると、仏教の「臨

機応変の手段」に対する重視は、参考とすることのできる思想的資源である。

(三) 縁起思想——「法界縁起」説の「円融」

すべての事物と現象の調和のとれた関係、釣り合いのとれた共存を理想の境界とし、現実のなかに存在する各種の矛盾、対抗、疎隔を取り除くことに力を尽くす。仏教のこのような追求と実践は、宗教間の敵視、怨恨、闘争を解消、ひいては除去し、宗教の平和共存の理念を樹立することにとつて、すべて有益である。

仏教の縁起思想は、仏教の方法論であり、仏教全体の学説を貫いている。仏教各派の縁起学説は互いに相違するけれども、中心的内容は基本的に一致しており、世界のいかなる事物もすべて一定の条件と要因に基づいて発生、発展、変化、消滅し、他の条件に依らないで独立して存在する事物はないと考える。縁起学説の特徴は、事物間の相互依存関係を強調し、事物間の普遍的な関係を重視することである。中国の華嚴宗は、インド仏教のこのようなオリジナルな思想に対して、

さらに実質的に発展させ、「法界縁起」の学説を提示した。

「法界縁起」の理論の重点は、世界の存在形式を論述する方面にあり、次のように考える。現存する世界を構成する「万法」（すべての現象や事物）は、本質的に相互依存、相互包摂、相互平等で、矛盾衝突のない調和のとれた統一のなかにある、と。このような華嚴哲学の基本的な特徴は、「円融」を提唱することである。円融は、世界を観察、認識する華嚴哲学の方法論であり、すべての問題を処理する総原則であり、また修行して到達しなければならない理想境界でもある。いわゆる「円融」は、主に二つの方面の意味を含んでいる。第一に、単独の事物や現象について言うと、それはその他の事物と関係する時にだけはじめて意義があり、特定の関係網のなかにある場合のみはじめて成立することができ。第二に、すべての事物や現象について言うと、それらの間には、相互に同一視し、相互に包摂し、隔たりのない関係が存在している。

華嚴宗は次のように考える。表面から見ると、すべ

ての事物はみな差別あるもので、互いに独立したものであるが、本質から観察すると、すべての事物はまた相互に融合し、相互に同一視できるものであり、したがって汝のなかに我があり、我のなかに汝があるという総体の状態を形成する、と。差別ある事物は際限がないので、事物間の相互の融合関係も際限がない。これを「無尽円融」と呼び、また「事事無礙」とも呼ぶ。

明らかに、孤立して存在する事物を否定し、事物間の普遍的な関係を強調することは、昔の縁起学説の固有の内容であり、けつして「法界縁起」の独創的な見解ではない。法界縁起説のまったく新しい内容は、次のことにある。「円融」を提唱することによって、世間の「万法」には本質上、隔たり、滞りのない関係が存在しており、努力によつて、世間の「万法」の調和のとれた秩序を樹立することができることを明らかにする。まさに澄観が説く「万法を融通させ、障礙無からしむ」（『華嚴経随疏演義鈔』巻二）のとおりである。

仏教それ自体について言えば、円融を強調することは、修行者の自信と勇気呼び起こし、異なる階層出

身の信徒を集めるのに有利である。他の宗教との関係を取り扱うことについて言えば、円融を提唱することは、宗派間の排斥、敵視、闘争を除去し、異なる宗教、異なる宗派の融合・発展を促進するのに有利である。これらのまったく新しい教理は中国仏教発展の需要に適合しているので、旺盛で持久的な生命力を備えている。「法界縁起」は、唐代以後の中国仏教各派がすべて受け入れた理論であり、中国仏学の隅々にまで浸透した思想であると言うことができる。一定の意義から言くと、中国の三教（儒教・仏教・道教―訳者注）の発展の歴史は、とりもなおさず互いに融合し発展した歴史である。この趨勢は、宋代の後の千年間において、十分に現われた。

世界の宗教の歴史から見ると、広範な影響を持つことになる宗教も、すべて閉鎖的な状態で発展したのではなく、すべて他の文化、文明、宗教を吸収し、融合する過程と関係している。宗教の過去の歴史は、このようであったし、未来の歴史も必然的にこのようであるだろう。もちろん、事物間には対抗、衝突、隔たり、

滞りがないという「法界縁起」の描写する関係説を紹介することは、けっして我々が歴史上、また現実に存在している宗教の衝突、対抗、ひいては宗教戦争に対してまったく無関心であるということではない。逆に、まさにそれらが人類社会にもたらした危害、災難を見るからこそ、「円融」の関係を提唱することに、さらに価値があるのである。

現代の世界には、国家、民族間の政治、経済、軍事の衝突もあり、また宗教間の衝突もある。このような情勢のもと、宗教は世界平和を擁護する勢力となるべきであって、国家、民族間の衝突、対抗を激化させ、ひいては戦争を引き起こす要因となるべきではない。多くのフィールド、多くのレベル、多くのルートにおいて、異なる宗教の友好的な対話を実現し、これによって異なる信仰者間の意思疎通、交流、友好を増進させ、世界を平和の方向に発展させるように促すのに対して、重要な意義を持つている。この角度から見ると、「法界縁起」の提唱する関係処理の態度と方法、追求される事物間の理想的な関係は、けっして雲をつかむよ

うな空中樓閣と見なすことはできない。理想的な関係を追求するこのような古い智慧は、歴史上、多方面にわたる重要で積極的な作用を発揮したことがあり、さまざまな歴史の制約や理論の欠陥は存在したけれども、主要な面から見れば、現代社会の各宗教間の関係を取り扱い、宗教対話を実現し、及び宗教の未来の発展の面を認識することによって、疑いもなく重要な参考となる機能がある。

（四）社会作用と倫理道德観の

二面からの各宗教の一致点

積極的な社会作用の面から宗教の本質と宗教共存の合理性を探索し、倫理道德観の面から異なる宗教の共通性と一致点を探る。宗教間の関係を取り扱う仏教のこのような原則は、広大で堅実な宗教対話の基盤を築くのには有利である。

どの大きな宗教もすべて自己の独特な聖典、排他性のある教義体系、崇拜のシステムなどをもっている。もし完全に自分の宗教の世界観、人生観、価値観に依

拠して、他の宗教の存在する合理性を判定し、評価し、完全に自己の宗教の立場に立つて、他の宗教との関係を取り扱うならば、疑いもなく宗教対話の空間を大いに狭め、相互理解のために障害を置くことになる。中国仏教には、他の宗教との関係を取り扱う面で、二つの顕著な特徴がある。第一は世間を改善し人を利する社会作用の面から各宗教の一致点を探索し、第二は倫理道德観の面から宗教の多元的な共存の一致点を探ることである。仏教はこれらの面から宗教の交流と意思疎通の基礎を打ち立てるのであって、自己の独特の教義に完全に依拠して、長短、優劣を競い争うものではない。

仏教が中国に伝来した当初から、中国の信仰者は、自己の宗教の合理性を論証することの重点を、社会に有利であるかどうかの面、世間を改善し人を利する面に置き、かつ一貫してそのことに変更や動揺はなかった。儒教、道教、ひいては諸子百家との関係を取り扱う面においては、中国仏教は、終始、それらが多元的に共存すべき理由は、それらにはすべて積極的な社

会作用があること、つまりすべて世間を改善し人を利する機能があることにある、と考えてきた。この面の資料は、代々とても豊富であり、ここでは宋代の僧、契嵩（一〇〇七—七二）雲門宗の禅僧（訳者注）を例とする。彼は指摘している。「方に天下に儒無く、百家無かる可からざれば、仏も無かる可からず。一教も虧くれば、則ち天下の一善道を損す。一善道を損すれば、則ち天下の悪は多きを加う」（『輔教編・広原教』）と指摘している。彼は『再書上仁宗皇帝』のなかで、彼が『輔教編』を作った理由、主旨は、「二教の聖人の道を推会し、世を善くし人を利するに同ず」（『鐔津文集』巻九を参照）ることにある、と説いている。各宗教の関係を取り扱う面において、著名な仏教僧はいつも共通点を見つけるというこのような思维方法を採用し、社会のためになり、衆生のためになる面から問題を考察してきた。

三教には「世を善くし人を利する」という共通性があり、同時に異なる面の需要に適應するために、異なる分担がある。仏教のこのような考えの筋道はまた統治階層に受け入れられた。南宋の孝宗は『原道弁』を

と排斥の作用を引き起こすものではない。もちろん、孝宗のここでのすべての言論は、彼の時代においてさえ、何の新意もなく、まったく仏教が数百年唱え伝えてきたいつもの論調を繰り返したものにすぎない。しかしながら、まさに仏教の一貫した主張に対するこのような賛同と提唱は、思想界、宗教界のために、ゆとりのある政治環境を提供し、三教がともに社会を安定させ、人間関係を協調させる作用を発揮するのに有益であり、また三教の共存と融合にも有益である。

倫理観の上で、宗教が多元的に共存する一致点を探ることは、また仏教が中国に伝来した当初から実践してきた一つの原則であり、かつ以後の長い歴史の過程で絶えず発揚された。そのなかで最も常に用いられたものは、仏教の五戒（あるいは十善）によって、儒家の五常（仁・義・礼・智・信）に通じさせ、この両者がまったく一致していると認めたことである。このような考えの筋道は、中国社会の各階層に広範に受け入れられた。早くも古今の家訓の祖と推される『顔氏家訓』のなかに、そのような話がある。宋代になると、仏教の

作り、唐代の韓愈の『原道』の反仏排仏の言論を批判することによって、三教の共存に反対した韓愈のような人々は、三教が共通に備えている一致性と、異なる適応性を見なかつたからである、と指摘したことがある。彼は、「三教の末流、味き者は之れを執り、自ら異と為すのみ。夫れ仏、老は、絶念無為にして、身を修むるのみ。孔子の教え、以て天下を治むるは、特に施す所、同じからざるのみ。譬えば猶お耒耜（すき）もて耕し、機杼（きしよ）の機械と横糸を通す道具（訳者注）もて織るがごとし。後世の徒は紛々として惑い、固（もと）より其の理を失う。或は曰わく、『当に其の惑を去るに、之れを如何んとすべき』と。曰わく、『仏を以て心を修め、老を以て身を養い、儒を以て世を治めば、斯（すなわ）ち可なり』と。其れ唯だ聖人のみ能く之れに同ずと為す。論ぜざる可からざるなり」（『雲臥紀譚』巻下）と述べている。これによって、いわゆる三教の「分担」説は、共通点を求めるという原則のもとで、また「異」を論じる。三教に存在する「異」は、社会の機能上、依然として相互に補足するという機能を備えており、相互の衝突

人士にはさらなる發揮があり、仏教の五戒・十善によって儒家の五常を理解するだけでなく、五常によって仏教のすべての説教を解釈した。契嵩は指摘している。「儒の所謂の仁義礼智信とは、吾が仏の、慈悲と曰い、布施と曰い、恭敬と曰い、我慢無しと曰い、智慧と曰い、妄言綺語（もうごんぎご）せずと曰うと、其の目為るや、同じからずと雖も、其の誠を立てて修行し、世を善くし人を利するに、豈に異ならんや」（『寂子解』。『鐔津文集』巻八を参照）と。このようにする一つの重要な目的は、倫理観の面において、三教を通じ合わせ、異なる宗教の共通性の重点を、積極的な社会作用の面に置くことである。

社会の発展にともない、異なる宗教の信仰者の相互接触と交流は、ますます頻繁となり、信者大衆の政治利益、経済利益、民族利益、及び文化背景などの面における差別によって、宗教の面の衝突の発生は、不可避である。しかし、これによって矛盾と衝突を、宗教関係の発展の趨勢と帰着点とすることはできない。宗教対話の目的は、人類の直面する危機を除去しようとすることであり、異なる宗教の信仰者間の相互適應、

相互理解、相互尊重を促進しようとするものである。これによって、仏教が人類社会に有益な面から宗教の共通性を探り、倫理観（殺を戒めることを第一とする）に着眼して、宗教の多元的な共存の一致点を探ることは、明らかに積極的な意義があるのである。

（五） 仏教の布教方法の四つの特色

終始、教法を広めることを、戦争に反対し平和を擁護することと結びつけ、異なる国家、地区、民族の間を通じ合わせる友好的な文化交流と結びつけ、社会を安定させ、人間関係を協調させることと結びつける。仏教のこのような積極的な平和精神と実践がもし現代の世界の各宗教の理論的な共通認識と自覚的な行動になるならば、世界平和を擁護する面における宗教の作用は、限らないものとなるであろう。

仏教は一つの地方的な宗教から発展して世界宗教となり、二千年の巨大な変化を経てきた。その悠久の伝播の歴史は、とりもなおさず平和を擁護する歴史であり、異なる国家、地区、民族の間を通じ合わせる友好

的な文化交流の歴史である。たとえ世界の諸宗教の伝播の歴史から考察しても、仏教はまた世界平和を擁護する手本であると称するに足りる。仏教の平和的な伝播の歴史のなかから、四つの重要な特徴を発見することができる。

第一に、教法を広めることを、平和を提唱し、社会の安定を促進し、民族の団結を増進させることと結びつける。

仏教は無条件に戦争に反対し、平和を提唱する。その平和主義の精神は、安定した基礎的教義のなかに根を下ろしており、かつそれぞれの面に現われている。仏教は、「殺生」をすべての戒律の第一に列し、殺生はすべての悪の源であると考ええる。中国の歴史上、仏教の基本教義を利用して殺戮に反対することは、著名な仏教伝道の高僧の自覚的な行動となった。たとえば、東晋十六国の時代、戦争は頻繁に起こり、後趙の仏教伝道者、仏図澄（二二一—三四八）は、仏教の慈悲、殺を戒める教義を強力に提唱し、かつこれによって殺生を好むことが習わしとなった後趙の統治者を教導した。

石虎が仏法とは何かと質問したとき、彼は「仏法は不殺なり」と答えた。彼は石虎に、「帝王」としての「奉仏」は、主に「暴虐を為さず、無辜を害さず」の面に現われると説いた。帝王が絶対に殺生しないということとは実行できないけれども、もし「暴虐すること恣意にして、殺害するも罪に非」ざれば、たとえすべての財産を取り出して仏法を供養しても、「殃禍」を免れない。彼はさらに石虎が「欲を省き慈を興し、広く一切に及ぼす」ことを希望した。このようにしてこそはじめて、「福祚は方に遠かならん」（上の引用はみな『高僧伝』巻九、仏図澄伝に見える）である。仏図澄は自己の特殊な身分と後趙の統治者の信任によって、仏教の伝播を、社会の安定、生産の発展、少数民族と漢族の関係の協調と緊密に結合させた。

第二に、終始、政治、経済、軍事の力に頼って他人を威嚇したり、強制して仏教を信仰させたりすることせず、主に經典の教義のなかに含まれる慈悲の品性、純潔の情操、深遠な哲理、高邁な境界、広大な気持ちによって、人を感化し、人を戒め導く。

宗教対話は、しばしば教法を広めることと関係し、宗教伝播の重要な構成部分となる。釈迦牟尼から始めて、他の宗教信仰者との対話を通じ、相手に精神の求めるものを与え、いかなる政治、経済の条件も付けない純粹な教義の教導や感化を通じて、相手を仏教に帰依させてきた。これらの記載は、仏教經典のどこにでも見られる。仏教の対外的な伝播のなかで、布教によって発生したいわゆる宗教戦争はこれまでなかった。さらに重要な事実、多くの国家と民族が仏教を信奉するのには、各種の非宗教的な要因の強制を受けなかったことであり、信徒は純粹に信仰という原因から、主体的に仏教の中心地区に行つて仏学を学習し、仏教を自己の祖国に伝播させたことである。仏教はインドから中国に伝播し、中国から日本、朝鮮、ベトナムに伝播したが、すべてこのような過程を経たのである。中国仏教史上、仏教文化の流伝のために貢献したものは、大部分は仏教典籍の翻訳の面で業績のあった学問僧である。もしこれらの学問僧の宗教信仰の範囲を超えた文化建設の仕事がなければ、中国古代の哲学、文学、

芸術などは、まったく別な様相を呈したであろう。仏教の伝播は、これらの国家、民族の間の平和友好の交流の架け橋と紐帯となつたばかりでなく、自国の文化を豊かにし発展させる強大な原動力ともなつた。

第三に、教法を広めることと、政治の関与、経済の略奪、文化の植民とは何の関係もない。古代インドの仏教が中国、及びその他のアジアの国家や地区に伝播しても、近代に西方の国家や地区に伝播しても、起点の地区の政治観念の輸出、経済面の略奪を伴わなかった。仏教伝播の文化的色彩は最も濃厚であり、それは仏教典籍を主な伝達媒体としており、特定の宗教の信仰と関係する文化の伝播である。仏教にはまたそれが流伝した地区において非宗教的な組織機構を建設したり、あるいは何らかの方法を採用して流伝地区の社会構造を改変したりしたことはない。たとえば、インド仏教は大規模に中国に伝来し、かつ中国は唐代に古代インドに取って代わつて世界の仏教の中心となりはじめたが、けつして古代インド社会の種姓制度や、ある王朝の政治統治、経済の略奪を持ち込まなかった。政

治の関与、経済の略奪、文化の植民の色彩のないことが、仏教の伝播の顕著な特徴である。

第四に、仏教の伝播は主に信仰者個人の自発的な行為、あるいは分散した地方の僧団の推進を頼っており、全国的な機構組織や政府の行為の推進に頼るものではない。

前漢と後漢の交代の頃、古代インド、及び中央アジアの各地出身の仏教信仰をもつた商人、使者、旅行者、及び移民の子孫たちは、自発的に仏教を中国の内地に伝えた。彼らの間には強大な組織が後ろ盾となることはなく、教法を広めることはまったく個人の自発的な行為であり、政府の行為ではなかった。以後の歴史の過程において、影響のあつた布教者は、ほとんどその仏学に精通しており、道徳が高尚であり、教導と感化に巧みなことで有名である。いくらかの布教者は、また医療、方術、その他の技芸を利用するのに巧みで、布教を助けた。布教の方法は多種多様であるけれども、一つの共通点がある。彼らはすべて故郷の強大な組織の支持のもとに布教したのではなかった。僧伝から知

ることのできることは、中国に布教しにやつて来た多くの古代インドの僧は、あるものは王室の出身であり、あるものは皇太子であり、あるものは国王の命を受けて来たものであるということである。しかし、「政治背景」のあるように見えるこれらの者は、けつしてどんな政治的使命も担うことなく、純粹に仏法の伝播を自己の任務としていた。高貴な身分は、教法を広める責任の重大さを示すものにすぎず、あるいは中央と地方政府の支持を勝ち取るのに便利であつた。

仏教が宗教関係を取り扱う伝統的な思想的資源は、「弱者の智慧」によつて完全に概括することができるものではない。歴史上、積極的な作用を発揮したことのある古代の智慧は、完全には現代社会に適合しないけれども、まったく価値のないものでもない。仏教の平和的な布教の面において現われたいくつかの特徴は、我々が現代世界の宗教の伝播方法、発展の趨勢、及び宗教間に樹立しなければならない関係を認識するために、価値ある参考を提供してくれる。

世界の宗教の範囲から見ると、さらに次のような現

象が存在している。ある宗教団体は組織の力、経済の勢力、ひいては政治背景に基づいて、人々を欺瞞し、脅迫して、宗教を信じさせ、あるいは対等でないいわゆる宗教対話を進め、あるいは非宗教的な活動に従事している。表面から見ると、このような宗教の伝播も平和的な方法によつて進んでいるが、しかし、仏教の平和的な伝播とは本質的に相違している。このような布教活動は、古代仏教が社会を安定させ、人間関係を協調させ、民族の団結を強化した、あの積極的な社会作用を備えておらず、ただ社会の矛盾を激化させ、民族の隔たりを拡大する、と云うことができる。

ある人は次のように考える。未来の世界は、過去の政治、軍事の衝突と対抗から、文明の衝突と対抗に転向し、そのなかには宗教の衝突と対抗も含まれる、と。このような論理によつて推理すると、東西の宗教の關係の発展の未来図は、せいぜい生きるか死ぬかの絶え間ない闘争でしかない。時間の推移に伴つて、人々はこのような論調の荒唐無稽さと、別に下心のあることにますますはつきりと気がついた。確かに、現代世界

の政治、経済、民族、宗教の衝突は依然として絶えず発生している。覇権主義の強権政治、宗教の原理主義、民族分裂の勢力は、すべて衝突と戦争をもたらす。それとは別に、異なる宗教の信者大衆は、相互の接触のなかで、民族の利益、政治の利益、経済の利益の面の矛盾によって、必然的に宗教間の衝突と対抗を誘発する。現代世界において、ある宗教の衝突と対抗は、政治、経済、民族などの要因によって引き起こされたものである。最終的に宗教の面の衝突と対抗を根絶することは、政治的、経済的、民族的対抗の要因を除去することにかかっている。

そうは言っても、依然として宗教の未来の発展の趨勢は、衝突、対抗であるという結論を出すことはできない。仏教の平和的な伝播の歴史を振り返ると、はつきりと次のことを見ることができる。仏教には異なる信仰グループの間の意思疎通、交流、理解を増進させ、互いの矛盾と敵視を消滅させ、衝突と対抗を防止する社会作用がある、と。これらは当然、仏教の独占ではなく、その他の宗教のなかにも発掘することができる。

したがって、宗教のなかの平和共存を提唱する思想的資源と実践的経験を開発し、絶えず変化する世界の情勢に対して、宗教対話を展開することは、宗教界が世界に平和の方向に発展するように影響を与えることにとって、重要な積極的意義があるのである。

(ぎ) どうじゅ／中国社会科学院研究員・世界宗教研究所

仏教研究室主任

(訳・かんの ひろし／創価大学教授)